

いしぎし
石岸遺跡

所在地 新城市須長
(北緯34度55分39秒 東経137度31分34秒)

調査理由 第二東海自動車道横浜名古屋線

調査期間 平成20年4月～平成20年9月

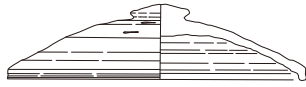
調査面積 800㎡

担当者 宮腰健司・樋上昇・岡久雅浩

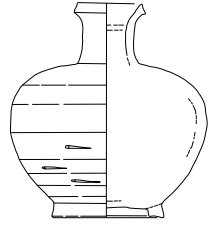


調査地点 (1/2.5万「三河大野」)

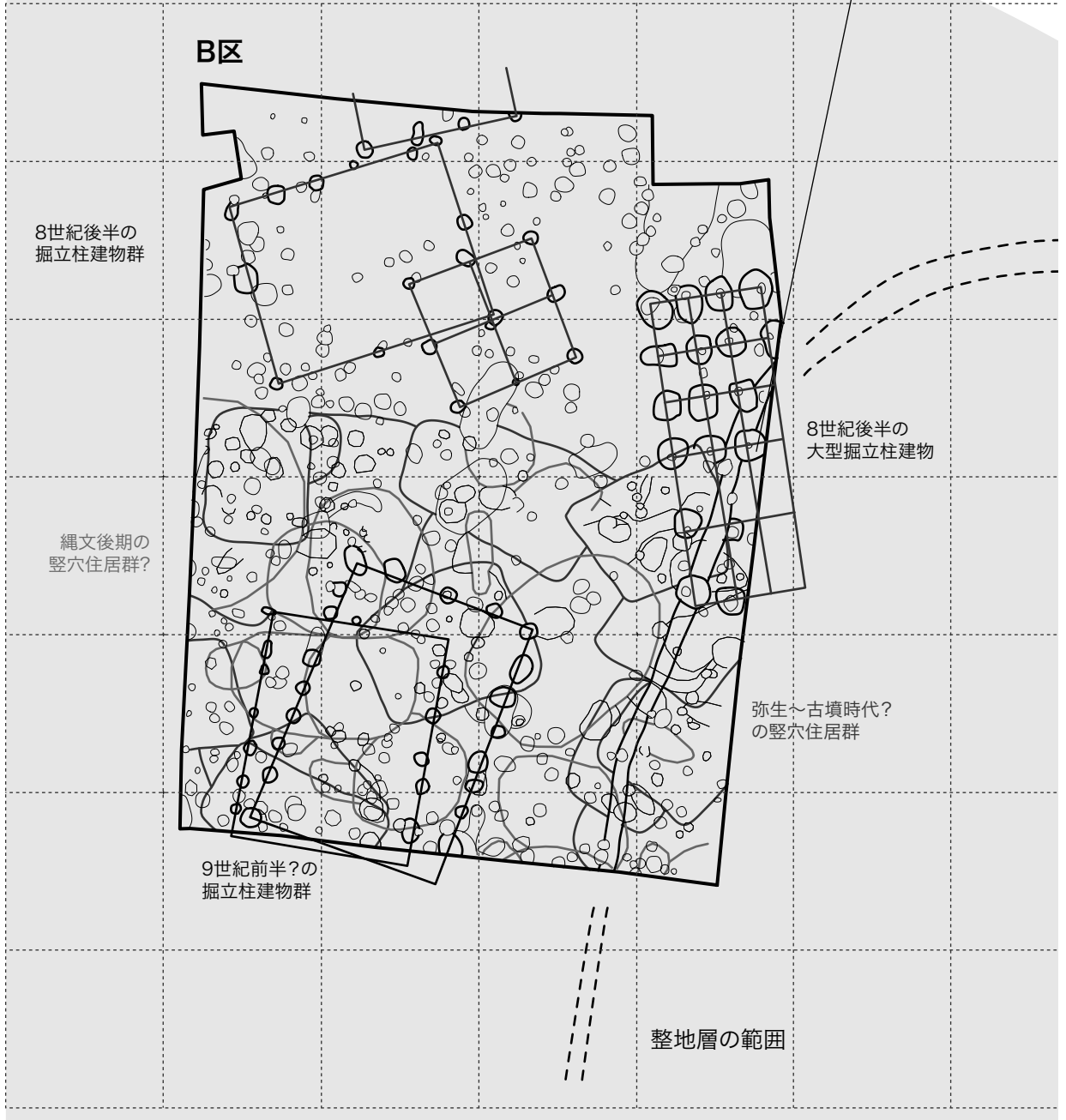
- 調査の経緯** 石岸遺跡の発掘調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。
- 立地と環境** 本遺跡は新城市のほぼ中央部に位置し、長篠・設楽原の合戦で有名な設楽原決戦場の北端に所在している。地形的には、雁峰山の南麓で、豊川の支流である連吾川左岸にある残丘の東側緩斜面に位置している。遺構検出面での標高は約80mである。
- 調査の概要** 調査区は橋脚部分の2ヶ所で、東がA区、西がB区である。検出した遺構は縄文時代・弥生～古墳時代・飛鳥～平安時代の3時期である。
- 縄文時代** 縄文時代の遺構は、B区の南半部に展開している。後期の竪穴住居とおもわれる直径3～5mを測る円形の落ち込みを9基検出した。土器・石器ともに多数出土しており、特に打製石斧の未成品がめだつ。このほか、小型の石棒も出土している。
- 弥生～古墳時代** 弥生時代中期～古墳時代前期と考えられる竪穴住居がやはりB区の南半部で13棟確認しており、うち1棟のみ炉跡が遺存していた。A区でもこの時期の土器が出土していることから、集落域はA区まで広がっていた可能性が高い。
- 飛鳥～平安時代** 7世紀前半から9世紀前半にかけて、本遺跡は大きく改変される。まず、7世紀前半には、A区の東端を南北に貫く河道に沿って、幅約1mの大溝が掘削される。この大溝は、A区北側までは幾筋かに分かれており、A区の中央で1本となり、南に流れる。A区北東隅では素木弓・火鑽臼・板材などの木製品がまとまって出土しており、この地で何らかの木製品生産が行われていたようである。A区北西隅にある土坑から、須恵器の甕と杯身が出土している。次いで、大溝より西側一帯に大規模な整地が施される。B区では整地層の厚さが40～50cmあり、総土量は推定で500㎡におよぶ。整地層に用いられた土は、B区西側の小山を削り取ったものと考えられ、8世紀前半を中心とする土器が多数含まれている。
- A区西半部ではこの整地層の上面で約10棟の竪穴住居、B区では大型掘立柱建物を含む数棟の掘立柱建物群を確認した。この掘立柱建物群は、主軸が北で10～20°西に振れるのを特徴としている。なかでも、B区東端で確認した建物は、東西が3間(3.5m)以上、南北が5間(10m)におよぶ大型の総柱建物で、柱掘形は長辺で約1mあり、柱の径は20～30cmを測る。ただ、南側2間分は柱間が広く、柱筋の通りがやや良くないことから、北側の3間分とは別の建物となる可能性がある。この掘立柱建物の北から4列目で、西から3番目の柱掘形から完形の須恵器長頸瓶が出土しており、築造時期を8世紀後半に特定することができた。規模からみて一般集落のものとは考えがたく、この地域を支配した豪族層の居館ないしは公的な施設ともなう倉庫(稲倉)とおもわれる。
- この大型掘立柱建物とは主軸を異にする掘立柱建物が2棟、重複してB区の南側に存在する。うち1棟は、南北が8間(8.5m)で東西は4間(5.8m)を測るが、柱掘形は丸く、柱間も不揃いである。主軸の方位は北で約20°東に振れており、A区の竪穴住居廃絶後に掘立柱建物(南北5間、東西3間)もこれに近い方位をとる。この方位は石岸遺跡の南西約1.5kmに遺存している神田条里制遺構の地割に近い。(樋上昇)



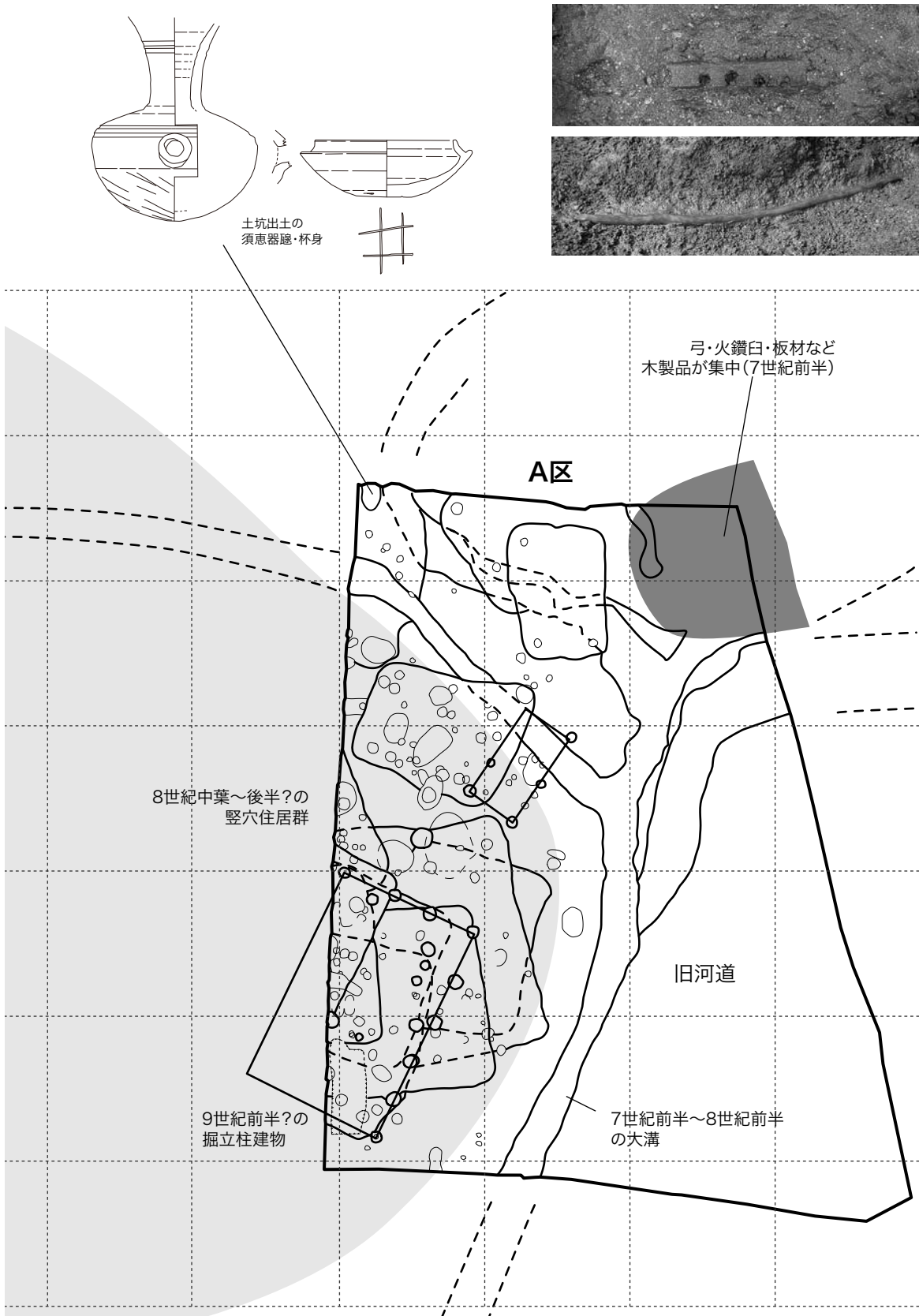
B区整地層出土の須恵器杯蓋



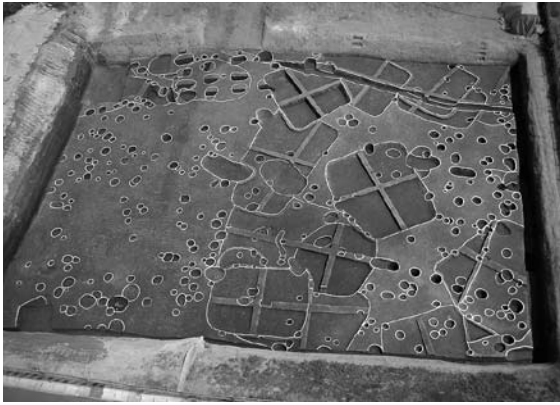
大型掘立柱建物の掘形から出土した須恵器長頸瓶



石岸遺跡全体図 (1:200)



石岸遺跡全体図 (1:200)



B区上面全景(西から)



A区上面全景(西から)



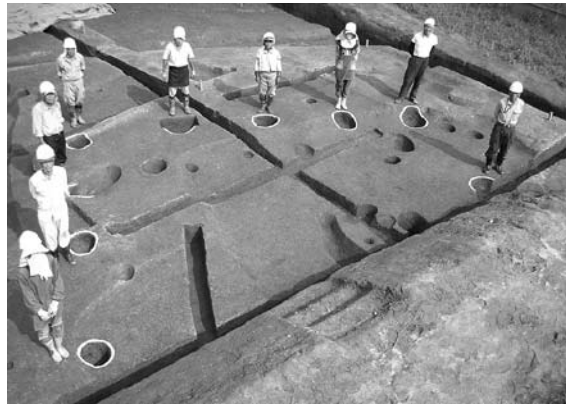
B区下面全景(東から)



A区下面全景(西から)



B区大型掘立柱建物(北から)



A区掘立柱建物(北西から)



B区掘立柱建物(北東から)



A区罎・杯身出土状況(南から)